

[トップ](#) [速報](#) [オピニオン](#) [経済](#) [政治](#) [ビジネス](#) [金融](#) [マーケット](#) [マネーのまなび](#) [テック](#)

小澤征爾さんを悼む 天真爛漫な努力家（前橋汀子）

[カバーストーリー](#)[フォローする](#)

2024年2月12日 5:00 [会員限定記事]

保存



マーラーの交響曲を指揮する小澤征爾さん（2006年7月、名古屋市）

一つの時代が終わった。小澤征爾さんの訃報を聞き、そう思った。

【関連記事】 [小澤征爾さんが死去、88歳 指揮者「世界のオザワ」](#)

小澤さんとの出会いは、私が中学生の頃に通い始めた桐朋学園「子供のための音楽教室」だった。20歳そこそこの小澤さんは、斎藤秀雄先生のアシスタントとして勉強中。高校生になると、協奏曲を弾く試験でピアノ伴奏もしてもらった。

小澤さんを象徴するような物がある。1961年、ソ連へ留学する際に饞別（せんべつ）でくれたビニールのカップパ（？）人形。息を吹き込んで膨らますもので、学生寮のベッドの傍らで3年間見守ってくれた。小澤さんは59年の仏ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝していたが、「世界のオザワ」と呼ばれるようになるずっと前のことだ。

ソ連での厳しい練習と生活、寂しさを気遣ってくれたのか。ペしゃんこにすれば道中で邪魔にならないと配慮してくれたのか。本人がどこまで考えたか分からない。だが物おじせず人と打ち解けてしまう天真爛漫（らんまん）さ。多言を弄することなく、打算なく、ウイットに富んだところが自然に表れる人柄。これこそ小澤さんの天賦の才、世界で指揮する武器だったのではないか。ライバルと見られていたカラヤン、バーンスタインという2人の巨匠の懐にも飛び込めた。

67年、米ジュリアード音楽院に留学中だった私は、武満徹さん作曲「ノヴェンバー・ステップス」のニューヨーク・フィルハーモニックによる初演にリハーサルから立ち会えた。和装をした琵琶と尺八の奏者が現れると、オーケストラは「何が起きるんだ」という雰囲気。ところが小澤さんが指揮台に立つと、音楽家の気持ちがそろっていくようだった。

当時、欧米に出て西洋のクラシック音楽をする東洋人は色眼鏡で見られるところがあった。小澤さんの人間力は、こうした偏見まで超えたのだ。後に「オーケストラは、考え方や人種も違う音楽家の集まり。だから、味が出るんだ」と話すのも聞いたことがある。

もちろん音楽への真摯な姿勢と、並々ならぬ努力があった。何度弾いたか知れないメンデルスゾーンのバイオリン協奏曲も、小澤さんとの協演は鮮明に覚えている。ひとくさりソロを弾いた後のオーケストラの出方が絶妙。そこへ至るまでの一音一音が極限まで大切にされていた。後にも先にもない幸福感だった。



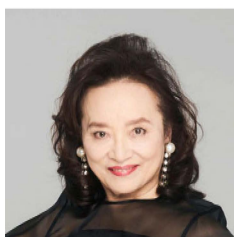
小澤征爾さん（右）とチェリストのロストロポーヴィチ（2005年9月、長野県松本市）＝ロイター

慣れっこになりがちな曲でも楽譜を丹念に読み込み、新しいことを見つける。ソリストとの打ち合わせから綿密に、リハーサルは謙虚に。ズービン・メータやルドルフ・ケンペといった偉大な指揮者とも共通する姿勢だった。大チェリストのロストロポーヴィチも「セイジ、セイジ」と呼び、随分慕っていたようだ。

とてもシンプルなことだが、音楽を愛していたのだと思う。当然、演奏家はみな音楽が好きだからやっているものだが、小澤さんは音楽が好きで好きでたまらなかった。

「サイトウ・キネン・フェスティバル松本（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）」で若い演奏家による室内楽のリハーサルを聴きながら、かじりつくように譜面を見ていた顔が記憶に残る。指導する立場でありつつ、どんなときでも作曲家の意図を読み取ろうと貪欲に学ぶ姿だった。

あれほど音楽を愛する人が、病のために指揮を振れないことは、どんなにつらかっただろう。「ゆっくり休んでください」とは言いたくないし、小澤さんにふさわしくないと思う。私の目には、天国でも楽譜とにらめっこしているあの顔が浮かぶから。



まえはし・ていこ 東京生まれのバイオリニスト。桐朋学園から旧レニングラード音楽院、ジュリアード音楽院に学び、スイスでヨーゼフ・シゲティに師事。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など世界のオーケストラと共演。

【関連記事】

- ・ [指揮者・小澤征爾さん死去 「伝える力」で若い奏者導く](#)
- ・ [指揮者・小澤征爾さんが死去（写真特集）](#)
- ・ [小澤征爾さん「私の履歴書」まとめ読み](#)
- ・ [小澤征爾さん死去、世界も悼む 「偉大な指揮者」たたえ](#)



[「日経文化」のX（旧Twitter）アカウントをチェック](#)

保存

